

# まちの薬局 つれづれ日記

日常の中で感じるあんなこと、こんなこと。class A の仲間でもあるヤマグチ薬局の山口晴巨さんが、薬剤師ならではの視点でお届けします。



山口晴巨・やまぐちはるお  
大阪薬科大学卒。18年間外  
資系製薬会社勤務後、2011  
年実家のヤマグチ薬局（大阪  
府吹田市）の経営を引き継ぐ。

薬局に来る患者さんに薬の説明をするわけですが、ものすごく神経質な方もおられます。特に「おばちゃん」と呼ばれる方々は大胆な性格でありながらも同時に繊細さを持ち合わせていることがよくあります。副作用、飲み合わせ、習慣性など、「大丈夫やろか？ 毎日飲んでも体にわるいやろか？」「できたら飲まへんほうがええんやろ？ 半分に減らしたほうがええのかな？」。何度も何度も聞いてきます。その時私の心の中では「なんでわかってくれへんのかな〜。それくらいの量やったら安全やからだいじょーぶやって言うてんのにー」と思いながら薬剤師らしく血中濃度のグラフを見せたり、副作用データを伝えたりして安全性を伝えてました。しかし最近「安全」と「安心」は全く別物ではないかということに気がきました。「安全」とは客観的指標であり、「安心」とは主観的指標ではないだろうか。科学的かつ論理的に考えると安全なものほぼ安心であり、安全≒安心となりますが、そのおばちゃんたちは安全と安心のレベルがだいぶん離れているんだろかな。不安なものは不安なんでしょう。ですので「安全だから安心なの。だいじょーぶ！」というのは、そのおばちゃんたちにとっては強引な理屈なのでしょう。

また、不安がられる薬の代表選手はステロイドだと思えます。「これは炎症を抑えるためのステロイドなんですけども…」と私が説明すると一瞬「えっマジ？」という反応が見て取れることがあります。「えーっ、これってステロイドなんですか？」「きつくはないですか？」。ほとんどの患者さんは納得してくれますが、どれだけ説明してもステロイド使用を忌避し「子供にこんなきつい薬を使いたくないんです」と言って泣いたお母さんもいた

し、虫さされのムヒに入っているステロイドも怖いと言って使わない患者さんもいました。「よく知らないけど怖い」「テレビで言ってた」「友達が言ってた」「娘がネットで調べてくれた」などなど。日本のステロイド忌避の原因は諸説ありますが、これら出処不明の不安に対して「科学的に正しい説明」が空振りすることもよくあります。

検査で不安になる人もいます。「先生に検査を受けなさいって言われてん。ガンやったらどうしよう。不安やわあ」と言ってたかと思ったら「検査結果は異常なしやって。ホンマやろか。不安やわあ」。どっちやねんと言いたいところですが私は「不安ですよー。わかりますわー。でもあの不安の正体って一体何なんでしょうね？」と逆におばちゃんに聞いてみたりします。するといろいろしゃべり始めるわけですが、この時おばちゃんは未整理の不安材料を相手の胸を借りながら整理しているような気がします。漠然としていた不安怪獣は徐々にその輪郭がはっきりしてきて、決して消えるわけではないけれども、実は田んぼのかかしみたいなものであったことに気づくのでしょうか。

## 「安心と安全」

町の薬剤師はこの安心と安全へのバランスのとれたスキルが必要だろうと思います。サイエンスと共感。エビデンスと傾聴。EBM 過ぎず NBM 過ぎず。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される」。夏目漱石先生の言葉が心にしみみます。町の小さな薬局では今日も科学的根拠に基づく世間話に花が咲き、処方せんどおり調剤された薬は「安心と安全」という付加価値がついて患者さんに手渡されています。